

リサーチ・フォーラム 2001

—第3回美術科教育学会課題研究会—

企画趣旨—リサーチ・フォーラムの流れとともに—

〈研究課題：総合学習と美術教育〉

宇田秀士

1. リサーチ・フォーラムの流れ

リサーチ・フォーラム（美術科教育学会課題研究会）は、本年度で3回目であるが、この間の研究課題は、以下の通りである。

第1回 美術教育における「ディシプリン（規範性）」—「美術の論理」と「子どもの論理」

第2回 美術批評と鑑賞の問題—『批評』の意味と鑑賞教育の実践

第3回 総合学習と美術教育

第1回目の研究課題は、いわゆる「金子／柴田論争」をうけて、20世紀の終わりに美術教育のディシプリンを検証しようとしたものであった。この壮大な設定のため、当日の発表・質疑及び討議では到底まとまりきれなかったが、その後、各発表者による様々な場での誌上発表により、徐々に深められていった印象がある。結果的に、これが総論・前提となり、第2回、第3回では、その各論としての「鑑賞教育」や「総合学習との関係」が、語られることになった。

ディシプリン（英仏 discipline, 独 disziplin）の語源的な考察については、藤江充（1987, 1988）（美術教育にディシプリンは存在するか？『愛知教育大学研究報告』36, 「学問にもとづいた美術教育」をめぐる議論について『大学美術教育学会誌』20）が詳しい。教会、修道院での集団生活を源としているために、現代の日本では理解が及びにくい面もあるが、技術発展、上達、人格を形成し正しい振る舞いをしつけるなどの過程で＜ある状態に導いていくための訓練＞、＜その結果として知識や自制・克己＞、＜指導者側から見た教授・訓練内容＞といった三側面が読み取れる。さらにJ.J. シュワブ（1962）、金子孫一（1975）、G.A. クラーク（1987）、佐藤学（1993）らの研究を集約すると、以下の3つの大きな意味が浮かび上がる。

(1) 学者・芸術家の共同体 (community of scholars/artists)

(2) 探究（認識又は思考）の方法 (a way of inquiry (knowing or thinking))

(3) 教授のために組織された知識の領域 (a domain of knowledge organized for instruction)

ディシプリン問題を考えていくときには、とかく(3)にのみ目が奪われがちであるが、(1), (2) がそれぞれ包含する「＜師匠-弟子＞あるいは＜教師-子ども＞といった関係性」「子どもが

自覚的に行動している場面で働かせている思考方法」といった内容も忘れてはならない。今回の研究課題にみられるように、「子供の論理」を如何に教育として組織するか、というときにはなおさらである。

2. 今回の課題設定の趣旨

コーディネーターの福本謹一は、今回の趣旨について、以下のように述べている。

(前略)…美術教科に対する配当時間数削減という状況において教科と総合的な学習の時間の関わりを論議することは、各方面で行われている。芸術教科の統合や教科廃止といったことが、まことしやかに語られる状況下で美術教育がどのような関係性を見いだしていけるのか、また、美術教科自体の学習の問い直しをどう図っていくのか、さらに今後の教科の存立についてアクション・プランを策定することは可能なのかといった問題意識に立脚しながら、総合学習の理論的・実践的な検討を行うことが重要であると考えた。

教育における総合的で統合的な動きは、近代のカリキュラム開発の一つの特徴として幾度となく立ち現れてきた。教科の分立化、並列化の中でカリキュラム改造の基本的理念として、教科間の融和、統合を図り、何らかの形で総合的で超教科的な形が常に模索されてきたのである。その理論、実践の様式はさまざまで一律ではない。歴史的には、ヘルバルドの教科の「相関」概念に基づいた学校教育における統合的アプローチに由来すると考えられるが、教科内における諸教材の統合を意味する場合や、中心的教科や価値領域を軸に他教科を集約しようとするもの、教科を全く設定せずに、特定の価値や理念、思考様式のもとに教育内容をすべて統合しようとするもの、生徒の生活経験上の個人的・社会的問題を中心にして教育課程を編成するものなど多様であった。我が国でも、総合学習の先導的な試みが展開されてきたが、その意味合いはそれぞれに異なっている。

こうした動向の中で、美術教育からのアプローチはいかなるものであったのか。米国の美術教育においては、60年代からそれこそディシプリンをまたぐインターディシプリナリーな取り組みが多様な形で展開したが、いつしかディシプリンに依拠するDBAEが脚光を浴びることになった。その学際的な取り組みは芸術内総合という形で展開し、必ずしもミドルスクールなどの総合的なプロジェクトアプローチには貢献をしなかったようである。

こうした諸外国の動向も見据えながら、総合的な学習の展開が到来するなかで、どれほど図画工作や美術科の自己像を明確にできるかどうか、また再構築主義や構成主義のもたらした自己＝他者、個人＝社会、教科＝教科などの関係性が追究される状況において、総合と美術教科との連携はどういった形で可能なのか。

こうした課題意識をふまえると、今回のリサーチ・フォーラムの第一義的な目的は、近代の教育課程論の基本的問題である総合もしくは統合の持つ意味を再確認しながら、総合学習の歴史的変遷を振り返るとともに、諸外国の総合学習を含む総合的な学習の時間の定立に至る諸背景を検討すること、さらにその美術教科の学習の意義を総合学習の実践とのかかわりにおいて検討することになろう。…(後略)

(『美術科教育学会通信』41, 2001年6月)

福本の文中にあるように、「総合・統合」の問題は、近代の教育課程論の基本的問題である。子どもは、＜基礎・基本的な事項やスキル＞と＜具体的な場面での熟考＞との往還の中で、身体の中に自分ならではの思考を「統合」し、浸透させていかねばならない。自分に適した思考方法をもたなければ、いろいろな局面で力を発揮できないことになるからだ。美術教育と総合学習との関連を考えることは、単に、教科と総合学習の内容領域の棲み分けを考えるだけではなく（もちろん、それも大切ではあるが）、子どもが、自覚的に表現・鑑賞しているときに働いている思考を考察し、それを意識的に働かせる方策をも探求していかなければならないのだろう。

進行過程

日時：平成 13（2001）年 8 月 28 日（火）10:00－17:00

場所：東京都中央区ぺんてる本社ビル 14 階会議室

参加者数：29 名

○ 10:00－10:25

代表理事挨拶

柴田和豊（東京学芸大学）

趣旨説明

司会 宇田秀士（奈良教育大学）

○ 10:30－11:15

口頭発表 1（質疑応答 15 分）

「総合学習と美術教育－教育学的観点から」 三浦浩喜（福島大学）

○ 11:25－12:10

口頭発表 2（質疑応答 15 分）

「欧米における総合学習の動向と諸傾向」 福本謹一（兵庫教育大学）

○ 12:20－13:20

昼 食

○ 13:20－15:00

口頭発表 3（質疑応答 20 分）

「総合的な学習をめぐる状況と展開－研究開発学校や特色ある教育活動実践校の分析を通して」

岩崎由紀夫（大阪教育大学）

「図工科からの総合的な学習の時間へのかかわりについて」

辻 政博（東京都板橋区立上板橋第二小学校）

「中学校における「総合的な学習」への美術教育的アプローチについて」

松原雅俊（神奈川県横浜市立上郷中学校）

○ 15:10－16:30

全体討議

○ 16:30－17:00

総括

宮坂元裕（横浜国立大学）

諸連絡、閉会